

■物部長徳 土木学者。ダム治水や耐震構造を先駆した巨星。古典的名著「水理学」。柔構造を提案した「土木耐震学」。

もののべながほ

初の対等条約1888＝ 秋田県仙北郡協和町で、大和で蘇我氏に敗れ秋田に下った物部那加世から続く由緒ある唐松神社宮司の長女寿女に入り婿した物部長元の次男に生まれる。

帝国憲法発布1889＝ 1歳： 7男4女の11人兄弟とともに、威厳ある父の薫陶を受けて育ち、

日清戦争始・1894＝ 6歳： この年、秋田県が大洪水に見舞われ死者330人、酒田地震も発生、

白馬会・・・1896＝ 8歳： 続く、陸羽地震などの体験が、のちの歩みに影響したと考えられる。

八幡製鉄始・1897＝ 9歳：

朝日尋常小学校を卒業。

日比谷公園・1903＝15歳： 秋田中学校を卒業。

日露戦争終・1905＝17歳：

満鉄発足・・・1906＝18歳：

韓国反日暴動1907＝19歳： この年、関東一円に大洪水。

アヲヲ創刊・1908＝20歳： 第二高等学校を卒業。東京帝国大学工科大学土木工学科に入学。

大逆事件判決1911＝23歳： 華族尾崎三良の五女元子と結婚。この年、関東一円に大洪水。土木工学科を首席で卒業し、恩賜の銀時計。卒業論文は「信濃川鉄橋計画」。鉄道院技手となり信濃川鉄道橋の詳細設計にあたり、名声高まる。

明治天皇没・1912＝24歳： 拔擢されて、内務省土木局第一技術課の技師となり、河川改修工事関係の実務を担当。かたわら、東京帝国大学理科大学に再編入し、理論物理学を学び、理学士の称号を得る。東京帝国大学の助教授を兼任。

大正政変・・・1913＝25歳： この年、異常低温が続いて、秋田県も大凶作。

第一次大戦始1914＝26歳： この年、仙北郡で直下型の強首都地震が起き被害甚大だったことから、さらに、耐震への志向を強め、

21ヶ条要求・1915＝27歳：

ペルシ条約・1919＝31歳： 「塔状建造物の振動」、

大暴落・・・1920＝32歳： 欧米の先進土木技術を視察。*「載荷せる建造物の振動並に其の耐震性に就て」を発表し、第1回土木学会賞。「建造物の振動並に其の耐震性に就て」の学位論文を母校の東京帝国大学に提出し、工学博士号を得る。

原敬首相暗殺1921＝33歳：

水平社結成・1922＝34歳： この年、内務省土木試験所が新設される。

関東大震災・1923＝35歳： 関東大震災が発生すると、綿密で科学的な被害調査や写真撮影を行い、地震被害調査書の手本となる。

護憲三派圧勝1924＝36歳： 論文「建造物の振動殊に其の耐震性の研究」を発表し、

治安維持法・1925＝37歳： *土木界初の帝国学士院恩賜賞。多目的ダム論「貯水用重力堰堤の特性並に其の合理的設計方法」を発表。

円本時代始・1926＝38歳： *10年飛ばしの抜擢で、第3代内務省土木試験所長に勅任されると、岩淵分室に水理試験所を設立。東京帝国大学教授を兼任し、河川工学講座を担当、また、震災予防評議会評議員となる。「我が国に於る河川水量の調節並に貯水事業に就て」を発表し、多目的ダム論を提唱。

金融恐慌・・・1927＝39歳： 土木試験所岩淵分室の水理試験所で量水堰検定を行い、以後水理実験が次々に行われる。

世界恐慌・・・1929＝41歳： 岩淵分室の水理試験所で我が国初の水理実験「北上川転動堰模型実験」を指導し、実施。

満州事変・・・1931＝43歳：

国際連盟脱退1933＝45歳： 二大著書「水理学」「土木耐震学」を公開。

帝人疑獄事件1934＝46歳： 痔が悪化し入院、手術直後、父が死去し、帰郷。「地震に因る動水圧を考慮せる重力堰堤の断面決定法」を発表し、重力式コンクリートダムの耐震設計理論を確立して、ハイダム建設の幕開けとなった。

二二六事件・1936＝48歳： 術後の回復が思わしくないため、*東京帝国大学教授を勇退。内務省を退職。東京市・東京電灯などのダム建設顧問となる。万国学術委員会第五部委員長に就任する。以後も、盛んに論文を寄稿していたが、

日中戦争始・1937＝49歳：

第二次大戦始1939＝51歳： それも途絶え、

日米開戦・・・1941＝53歳： 発病し、父の命日に、没した。